

令和 8 年 8 月 3 日	農作物病虫害発生予報 8 月	山 口 県 病 害 虫 防 除 所 山 口 県 農 林 総 合 技 術 セ ン タ ー
-------------------	---------------------------	--

～目 次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病虫害】	2
	【その他の病虫害】	16
III	参考(予報の見方、気象予報)	17

I 予報の概要

農作物名	病 害 虫 名	予想発生量	現 況	
			平年比	前年比
イネ	いもち病（穂いもち）	平年並	—	—
	紋枯病	平年並	平年並	多
	ごま葉枯病	多	多	多
	セジロウンカ	平年並	やや少	多
	トビイロウンカ	やや多	やや多	多
	コブノメイガ	やや多	やや多	多
	斑点米カメムシ類	平年並	平年並	少
ダイズ	ハスモンヨトウ	平年並	平年並	前年並
カンキツ	かいよう病	平年並	平年並	少
	黒点病	やや多	やや多	多
	ミカンハダニ	やや多	平年並	多
ナシ	黒斑病	やや多	多	前年並
	黒星病	やや多	やや多	多
	ハダニ類	やや多	平年並	多
果樹全般（モモ、ナシ、リンゴ）	カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）	やや多	やや多	多

お問い合わせ先

TEL（０８３５）２８－１２１１（代）

FAX（０８３５）３８－４１１５

E-mail a172011@pref.yamaguchi.lg.jp

Ⅱ 予報

【主要病害虫】

イ ネ

1 いもち病（穂いもち）

(1) 予報内容

予想発生量	防除時期
平年並	粉剤・液剤：穂ばらみ後期と穂揃期の2回 粒剤・パック剤：出穂前

(2) 予報の根拠

ア 下旬の調査では、葉いもちの発生ほ場率20.7%（平年22.1%）、発病株率3.9%（平年9.5%）、発病度1.0（平年2.5）、病斑の最上位葉2.6（平年2.6）で平年並であった（－）。

イ 気象予報では、8月の気温は高い、降水量は平年並か少ない、日照時間は平年並か多い（－）。

(3) 防除対策

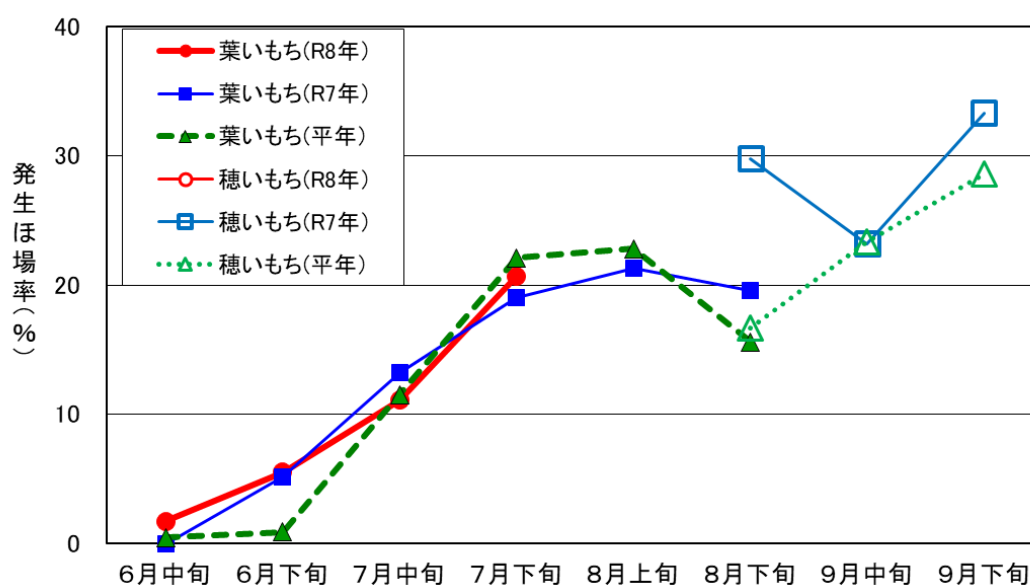
<耕種的防除>

窒素肥料の多用は避ける。

<防除のポイント>

ア 葉いもちが上位葉に発生しているほ場では、直ちに防除を行う。また、穂いもちの防除予定日まで7日以上ある場合（止葉抽出前）は、葉いもちの防除を行い、その後、穂いもちの防除を実施する。

イ 穂いもちの防除を適期に実施する。粉剤・液剤は穂ばらみ後期及び穂揃期の2回行い、粒剤・パック剤は出穂前に施用する。



イネいもち病の発生推移

2 紋枯病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	多	粉剤・液剤：穂ばらみ期（出穂14日前頃） 粒剤：出穂30日～10日前

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率3.7%（平年3.7%）、発病株率0.1%（平年0.4%）、発病度0.0（平年0.1）で平年並であった。（±）。

イ 気象予報では、8月の気温は高い（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

窒素肥料の多用は避ける。

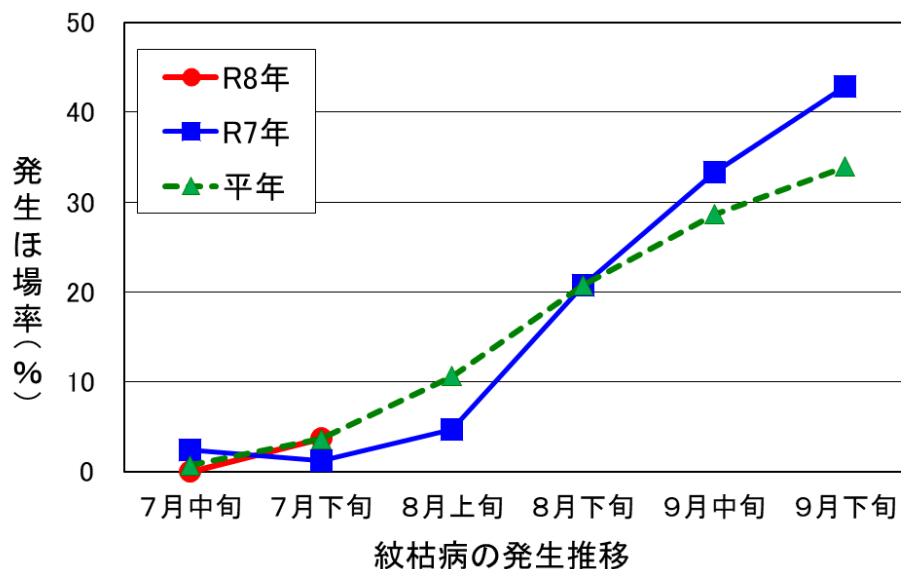
<防除判断>

防除適期は幼穂形成期～穂ばらみ中期（出穂25～14日前頃）。穂ばらみ中期の発病株率が15～20%以上の場合は、モンガリット剤、バリダシン剤等で防除する。

<防除のポイント>

ア 出穂期を過ぎると薬剤散布の効果が劣るので、適期防除に努める。また、株元まで十分に薬剤がかかるよう、ていねいに散布する。

イ 昨年多発したほ場では、特に発生に注意する。



3 ごま葉枯病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	穂いもちとの同時防除を行う。

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率18.3%（平年5.9%）、発病株率5.6%（平年1.9%）、発病度1.4（平年0.5）で平年に比べ多かった（+）。

イ 気象予報では、8月の気温は高い（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

ア 肥料切れは発病を助長するので、必要に応じて穂肥を施用する。

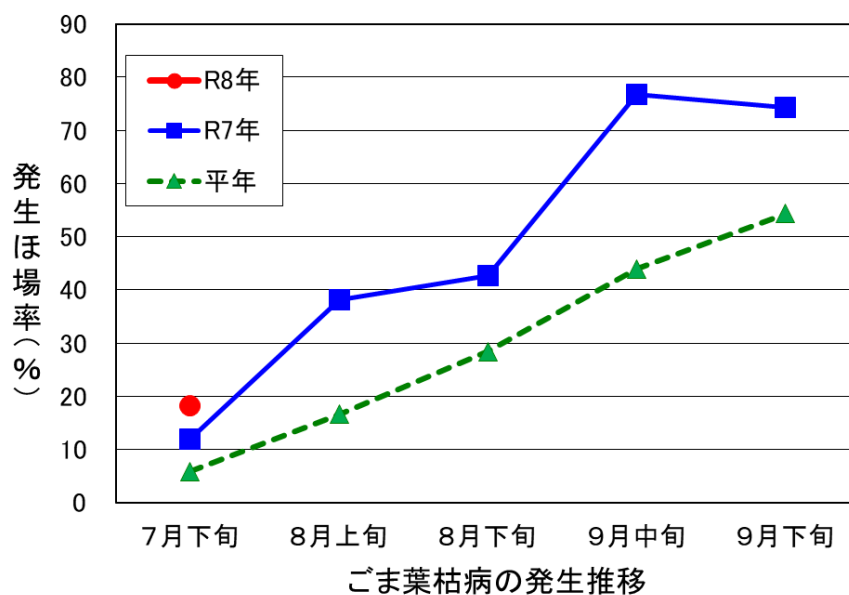
イ 根の健全化を図る。

<防除判断>

発生状況に注意し、穂枯れを発生させないようにする。

<防除のポイント>

穂いもちとの同時防除を基本とし、ごま葉枯病に適用のある剤を使用する。



4 セジロウンカ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	やや少	多	株当たり成幼虫50頭以上（穂ばらみ中期まで）

(2) 予報の根拠

ア 6月29日～7月28日の予察灯(県内3か所)における誘殺数は649頭（平年163頭）で平年に比べ多かった（+）。

イ 下旬の巡回調査では、発生ほ場率17.1%（平年42.5%）、10株当たり虫数0.4頭(平年7.4頭)で平年に比べやや少なかった（-）。

ウ 気象予報では、8月の気温は高い、降水量は平年並か少ない（+）。

(3) 防除対策

<防除判断>

穂ばらみ中期までに株当たり50頭以上（成幼虫）の多発生があれば、褐変穂を生

じる可能性があるため薬剤防除を行う。

<防除のポイント>

ア 飼料用米では多発する場合がありますので注意する。

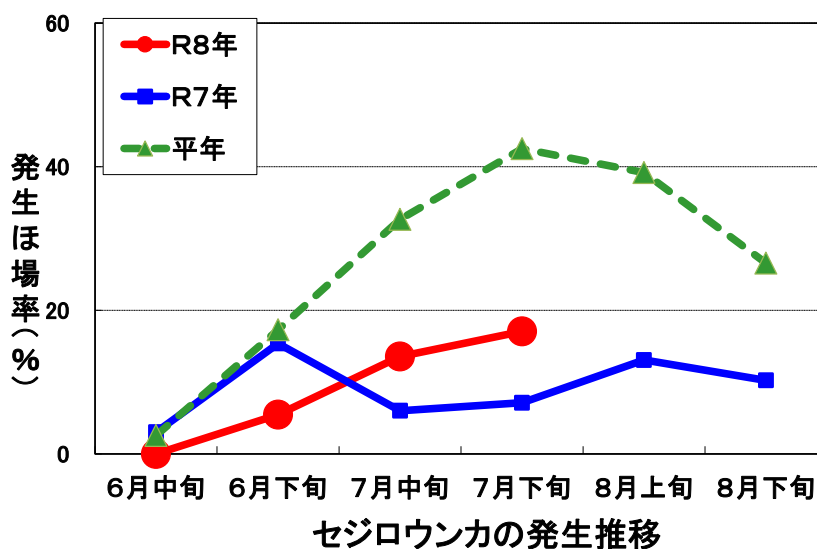
イ 出穂した後のほ場では、防除の必要性は低い。

セジロウンカ		JPPネット有効積算温度シミュレーション											
		7月						8月					
飛来日	飛来量	5	10	15	20	25	30	5	10	15	20	25	30
6月20日	中	卵	第1世代幼虫	第1世代成虫	卵	第2世代幼虫	第2世代成虫	卵	第3世代幼虫				
6月25日	中	卵	第1世代幼虫	第1世代成虫	卵	第2世代幼虫	第2世代成虫	卵	第3世代幼虫				
7月1日	中	飛来成虫	卵	第1世代幼虫	第1世代成虫	卵	第2世代幼虫	第2世代成虫	卵	第3世代幼虫			
7月5日	多	飛来成虫	卵	第1世代幼虫	第1世代成虫	卵	第2世代幼虫	第2世代成虫	卵	第3世代幼虫			

■: 防除適期

7月30日現在

セジロウンカの防除適期予測図



5 トビイロウンカ

令和8年7月13日付け令和8年度農作物病害虫発生予察注意報第3号参照

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/122/22328.html>

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	8月上旬までは成幼虫100株当たり20頭以上 8月中旬～9月上旬は株当たり成幼虫5頭以上

(2) 予報の根拠

ア 6月29日～7月28日の予察灯(県内3か所)における誘殺数は19頭(平年2.1頭)で、平年に比べ多かった(+)。

イ 下旬の巡回調査では、発生ほ場率3.7%(平年6.2%)、10株当たり虫数0.0頭(平年0.2頭)で平年に比べやや多かった(+)。

ウ 気象予報では、8月の気温は高い、降水量は平年並か少ない(+)。

(3) 防除対策

<防除判断>

- ア ほ場の発生状況を確認し、防除の目安を超えていた場合は直ちに防除する。
- イ 防除の目安は、8月上旬までは成幼虫100株当たり20頭以上、8月中旬～9月上旬は株当たり成幼虫5頭以上である。
- ウ ほ場を確認する際には、ヒメトビウンカの幼虫と見誤らないようにする。

<防除のポイント>

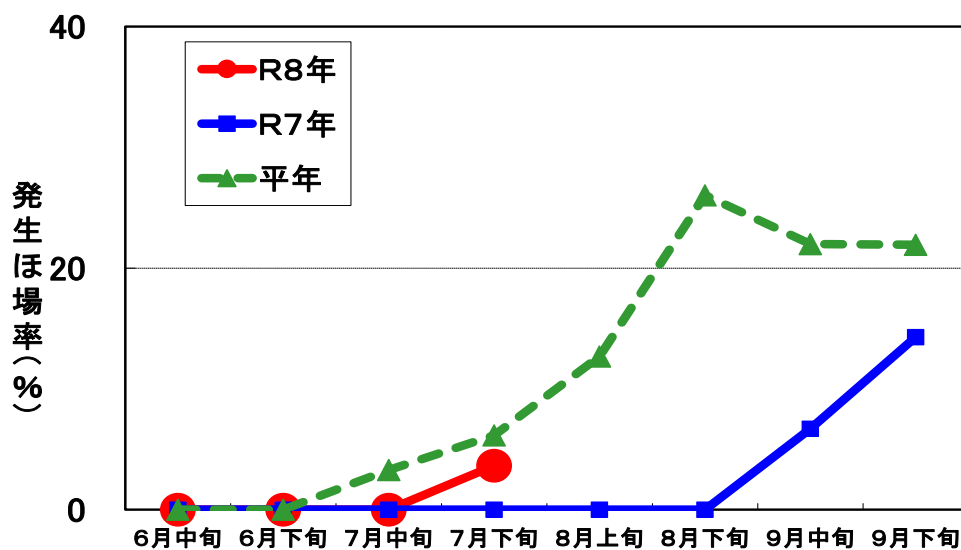
- ア 長期持続型箱施用剤を施用したほ場でも発生状況をよく確認する。
- イ 薬剤が株元にかかるように、ていねいに散布する。

トビイロウンカ		JPPネット有効積算温度シミュレーション											
		7月						8月					
飛来日	飛来量	10	15	20	25	30		5	10	15	20	25	30
6月20日	少	卵	第1世代幼虫	第1世代成虫	卵	第2世代幼虫	第2世代成虫	卵					
7月1日	少	飛来成虫	卵	第1世代幼虫	第1世代成虫	卵	第2世代幼虫	第2世代成虫					
7月5日	多	飛来成虫	卵	第1世代幼虫	第1世代成虫	卵	第2世代幼虫	第2世代成虫					

■: 防除適期

7月30日現在

トビイロウンカの防除適期予測図



トビイロウンカの発生推移(発生ほ場率)

<参考>



トビイロウンカ短翅成虫
(体長4～5mm、光沢ある褐色)



トビイロウンカ幼虫
(体長2～3mm、全体的に褐色)



ヒメトビウンカ幼虫
(体長3mm弱、クリーム色主体、
体の両側に褐色の縦帯)

6 コブノメイガ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	成虫の払い出しで1 m ² 当たり5頭以上

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率62.2%（平年25.3%）、被害葉率0.4%（平年0.3%）、20回払い出し虫数0.8頭（平年0.9頭）で平年に比べやや多かった（+）。

イ 気象予報では、8月の気温は高い、降水量は平年並か少ない（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

葉色の濃いイネに好んで飛来するため多肥を避ける。

<防除判断>

ア 成虫の払い出し調査で5頭/m²以上であれば、若齢幼虫発生期に防除を実施する。

イ 減収が問題となるのは、出穂期に上位2葉の被害葉率が15%（株率80%程度に相当）以上とされている。

コブノメイガ

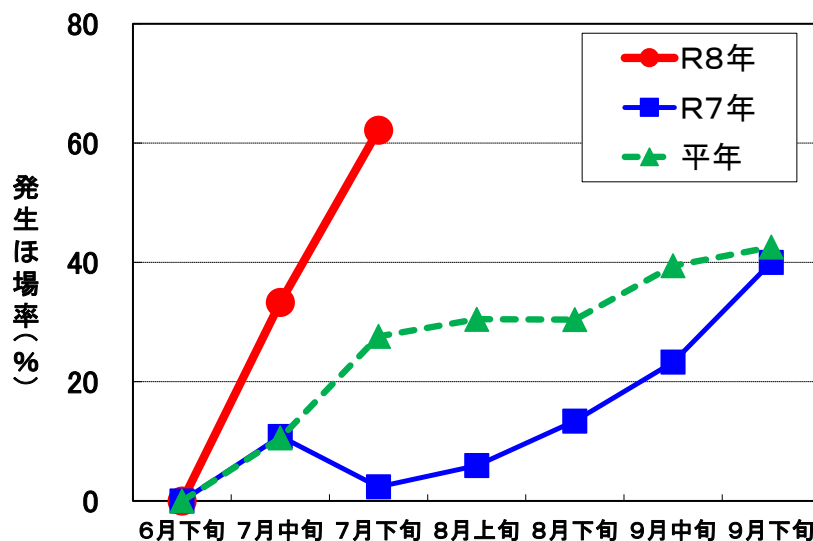
JPPネット有効積算温度シミュレーション

		7月					8月						
飛来日	飛来量	10	15	20	25	30	5	10	15	20	25	30	
6月22日	少												
		第1世代幼虫		第1世代蛹	第1世代成虫	卵	第2世代幼虫			第2世代蛹	第2世代成虫	卵	第3世代幼虫
7月5日	少												
		第1世代成虫	卵	第1世代幼虫			第1世代蛹	第1世代成虫	卵	第2世代幼虫			第2世代蛹

■: 防除適期

7月30日現在

コブノメイガの防除適期予測図



コブノメイガの発生推移（発生ほ場率）

7 斑点米カメムシ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	穂揃期と穂揃期 7 日後の 2 回防除を徹底する (液剤の場合)

(2) 予報の根拠

ア 6月26日～7月25日の予察灯（県内3か所）における主要種の誘殺数は、2,911頭（平年2,648頭）で平年に比べやや多かった（＋）。

イ 下旬の雑草地20回すくい取り調査では、52.9頭（平年126.4頭）で平年に比べ少なかった（－）。

ウ 気象予報では、8月の気温は高い、降水量は平年並か少ない（＋）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

カメムシ類が増えるのを避けるため、出穂2週間前までに畦畔等の草刈りを実施し、それ以降もイネ科雑草（エノコログサ、メヒシバ、ヒエ等）の穂が出ないように管理するとより効果的である。なお、イネカメムシはイネ科雑草に寄生しないため、畦畔の草刈りを行ったほ場でも多発する場合があるため注意する。

<防除のポイント>

ア 防除時期（液剤等）：穂揃期と穂揃期 7 日後

ただし、イネカメムシの発生が認められるほ場では、出穂期と出穂期 7 日後

イ 粒剤で防除を行う場合は、液剤より 3～4 日早く散布する。

ウ 防除後、ほ場での発生状況を確認し、斑点米カメムシ類の発生が認められる場合は、さらに 7 日後の追加防除を実施する。

表 予察灯における斑点米カメムシ類主要5種の誘殺数(6月26日～7月25日、県内3か所合計)

年度	大型種			小型種		合計
	クモヘリカメムシ	イネカメムシ	ミナミアカメムシ	アカスジカスミカメ	アカヒゲホムトリスミカメ	
令和8年	51	119	53	2617	71	2911
平 年	33	50	45	2202	318	2648



写真1
クモヘリカメムシ成虫
(体長16mm程度)



写真2
イネカメムシ成虫
(体長16mm程度)



写真3
アカスジカスミカメ成虫
(体長5～6mm)

ダイズ

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	若令幼虫最盛期

(2) 予報の根拠

ア 6月21日～7月20日のフェロモントラップ(県内5か所)の誘殺数は3,138頭(平年2,594頭)で平年並であった(±)。

イ 気象予報では、8月の気温は高い、降水量は平年並か少ない(+)。

(3) 防除対策

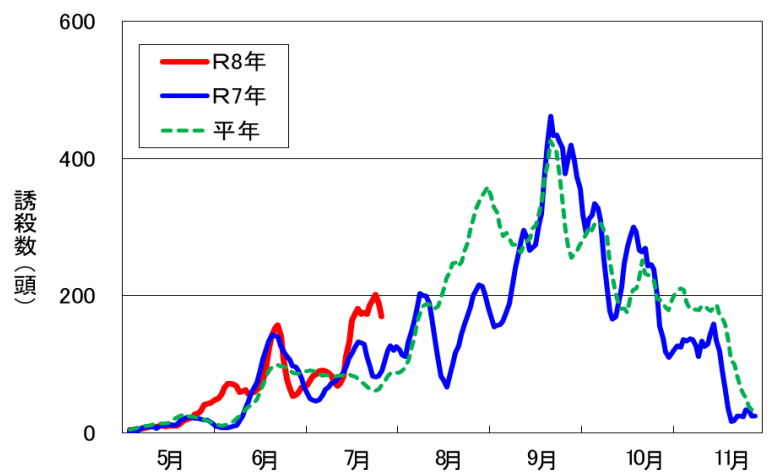
<防除判断>

防除の目安は、白変葉の発生か所数が1アール当たり5か所以上である。

<防除のポイント>

ア 中～老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、若齢幼虫期の防除を徹底する。

イ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。



フェロモントラップにおけるハスモンヨトウ誘殺数(県内5カ所合計:移動平均)



ダイズ白変葉



ハスモンヨトウ(卵+若齢幼虫)



ハスモンヨトウ（老齡幼虫）

カンキツ

1 かいよう病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	台風等強風の襲来前

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率10.5%(平年10.9%)、発病果率2.3%(平年1.1%)、発病度1.2(平年0.5)で平年並であった(±)。

イ 気象予報では、8月の降水量は平年並か少ない(±)。

(3) 防除対策

<防除判断>

発生が見られるほ場や、高糖系温州みかん、ナツミカン、レモン等発病しやすい品種では、台風等強風の襲来前に防除を実施する。

<防除のポイント>

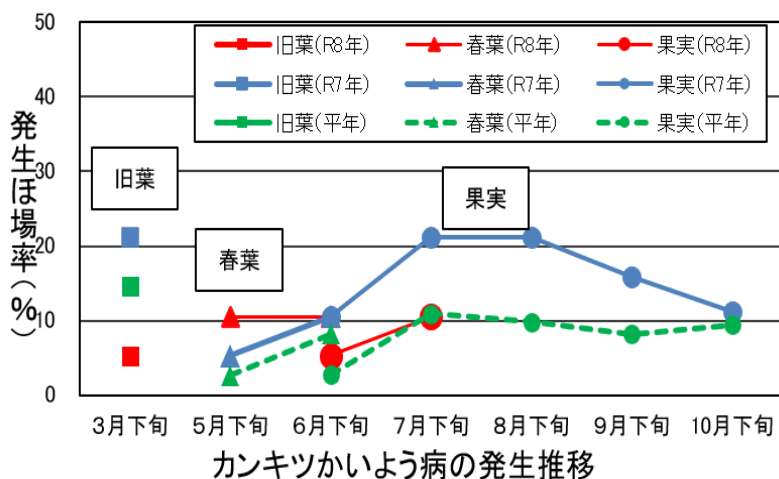
ア ミカンハモグリガの被害は、感染を助長することから防除に努める。

イ 病斑のある枝や葉は伝染源となるので除去する。

ウ 防風樹や防風ネットを整備し、強風による感染を防ぐ。

エ 無機銅剤（コサイド3000やZボルドーなど）を散布する場合は、薬害を低減するため炭酸カルシウム水和剤を加用する。

オ ICボルドー66D、ICボルドー412は夏季高温時の散布では、薬害を生じる恐れがあるので使用を避ける。



2 黒点病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	前回防除後の累積降水量が200mmに達したとき、または薬剤散布後1か月を経過したとき

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率73.7%(平年56.1%)、発病果率19.5%(平年8.9%)、発病度8.7(平年2.2)で平年に比べやや多かった(+)。

イ 気象予報では、8月の降水量は平年並か少ない(±)。

(3) 防除対策

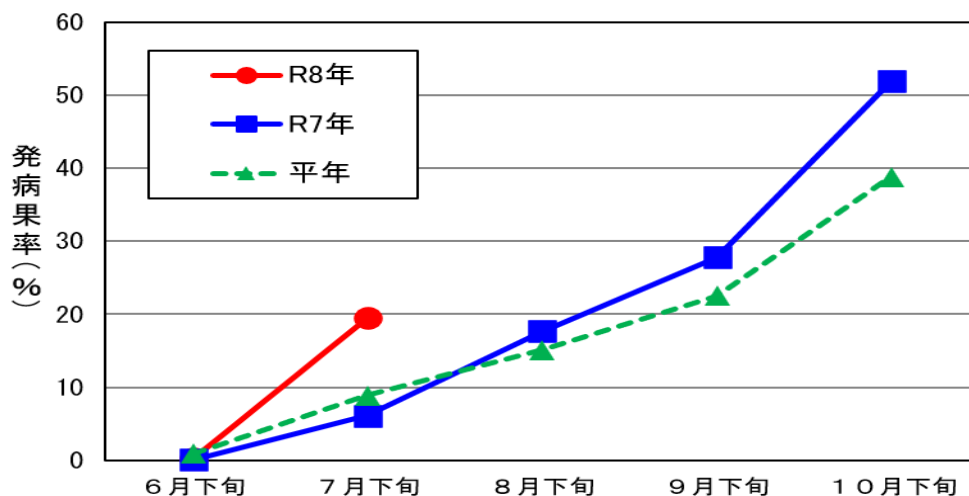
<防除判断>

前回薬剤散布後、200mm以上の降雨があった場合、又は降水量が少ない場合は、1か月以上経過したとき、再度薬剤防除を実施する。

<防除のポイント>

ア 樹冠内の枯れ枝や放置された剪定枝等は本病の伝染源となるので、園外に持ち出して処分する。

イ 「せとみ」の黒点病は病斑が大きくなり、外観品質に及ぼす影響が大きいため、防除が遅れないように留意する。



カンキツ黒点病の発生推移

3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	平年並	多	雌成虫の寄生葉率30~40%以上 または雌成虫1葉当たり0.5~1頭以上

(2) 予報の根拠

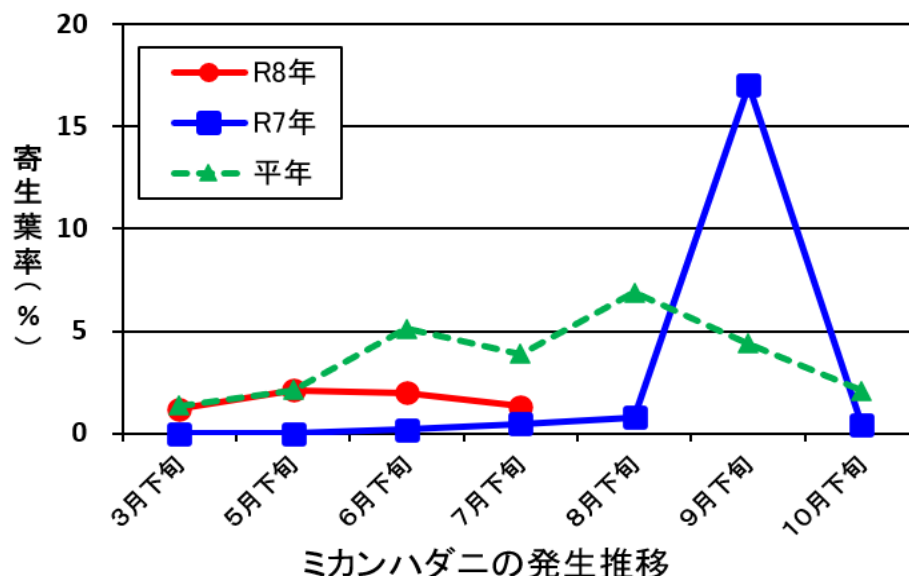
ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率36.8%(平年26.3%)、寄生葉率1.3%(平年3.9%)で平年並であった(±)。

イ 気象予報では、8月の気温は高い、降水量は平年並か少ない（+）。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

発生量はほ場によって大きく異なる。定期的にはほ場を見回り、発生状況を確認する。



ナ シ

1 黒斑病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	多	前年並	7～10日間隔で防除

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率55.6%（平年26.2%）、発病葉率0.4 %（平年0.3%）、発病新梢率8.4%（平年2.3%）で平年に比べ多かった（+）

イ 気象予報では、8月の降水量は平年並か少ない（±）。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 薬液が新梢の先端まで十分かかるようていねいに散布する。

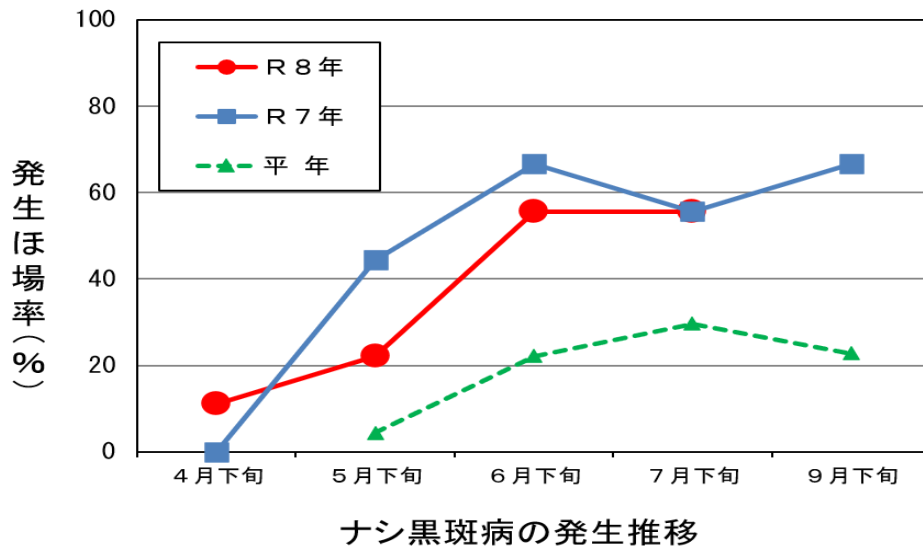
イ ほ場を定期的に見回り、り病葉やり病果は園外に持ち出し処分する。

ウ 混み合った不用な新梢を間引き、園内の風通しを良くして湿度を下げる。

エ 同一系統の薬剤の連用は避ける。また、ポリオキシシン剤、クレソキシムメチル剤の耐性菌が県内で確認されているので、効果が認められない場合は他の薬剤を選択する。

令和8年7月2日付け令和8年度農作物病害虫発生予察技術資料第3号参照

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/122/22318.html>



2 黒星病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	黒斑病、輪紋病と同時防除を行う。

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率33.3%(平年19.4%)、発病葉率1.2%(平年0.9%)で平年に比べやや多かった(+)。

イ 気象予報では、8月の降水量は平年並か少ない(±)。

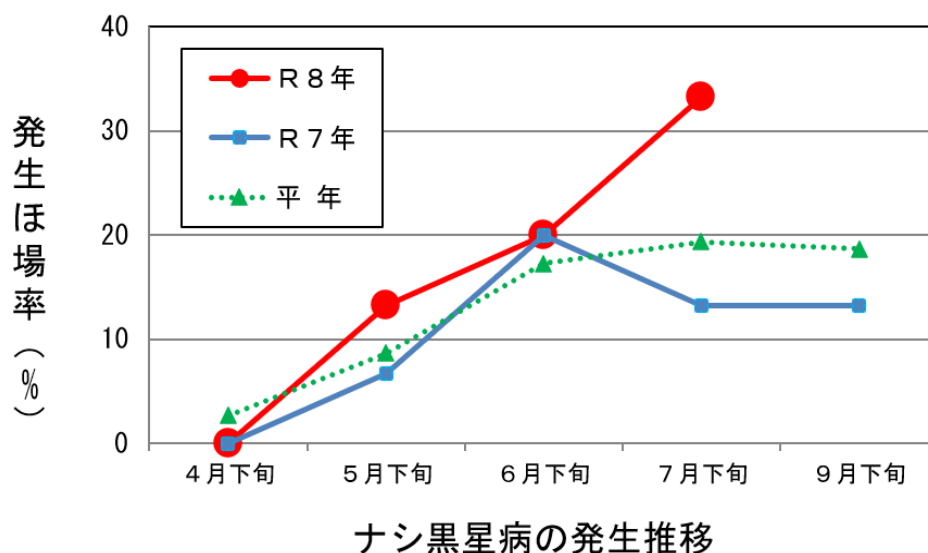
(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア ほ場を定期的に見回り、り病葉やり病果は園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤耐性の発達を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。

ウ ベンレート剤(殺菌剤コード1)では耐性菌が出現しているので、防除の後必ず防除効果を確認し、防除効果が劣る場合は、他剤を使用する。



3 ハダニ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	平年並	多	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率20.0%(平年17.4%)、寄生葉率3.1%(平年3.9%)で平年並であった。(±)。

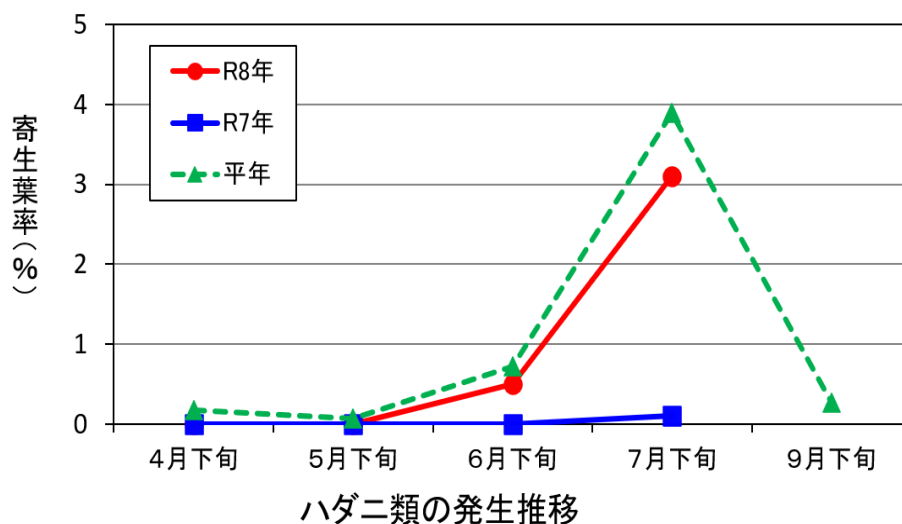
イ 気象予報では、8月の気温は高い、降水量平年並か少ない(+)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 乾燥期にハダニ類が多発すると早生種では葉焼けが助長され、早期の落葉を招くので、防除を徹底する。

イ 薬剤防除の際は収穫前日数に注意の上、かけむらがないよう十分な量でいねいに散布する。



果樹全般 (モモ、ナシ、リンゴ)

1 カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ)

令和8年4月30日付け令和8年度農作物病虫害発生予察注意報第1号参照

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/122/22328.html>

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	園地への飛来を確認した時

(2) 予報の根拠

ア 6月21日～7月25日の予察灯(県内4か所)における誘殺数は1,127頭(平年482頭)で平年に比べやや多かった(+)。

イ 6月26日～7月25日のフェロモントラップ(県内3か所)によるチャバネアオカメムシの誘殺数は15,031頭(平年7,831頭)で平年に比べやや多かった(+)。

ウ ヒノキの毬果量調査(県内6か所、6月下旬調査)では、スギの着果程度は平年に比べやや多く、ヒノキの着果程度は平年並であった(±)。

(3) 防除対策

<防除判断>

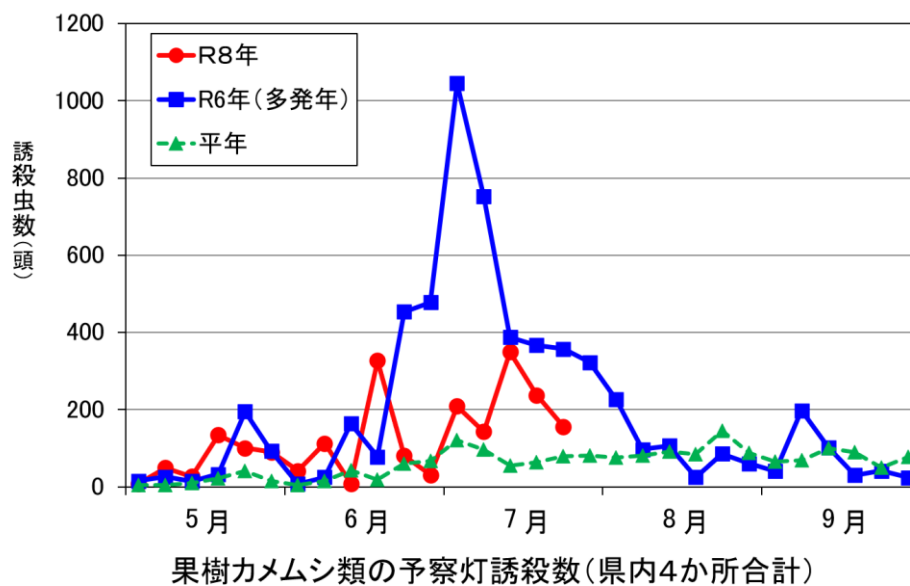
7月末から発生する新成虫の飛来時期や量は、地域や園地による差が大きいので、活動が活発になる夕方に園地や灯火を定期的に確認し、カメムシ類の飛来を把握する。

<防除のポイント>

ア 無袋栽培園では、飛来を確認したら速やかに薬剤散布を行う。

イ 有袋栽培であっても、果実の肥大に伴い袋に接して加害されやすくなるため、飛来を確認したら薬剤散布を行う。

ウ カメムシ類に対する薬剤散布によって、ハダニが増殖する場合があるため、発生状況に注意する。



【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予 想 発 生 量	現 況		発生ほ場率(%)		備 考
			平年比	前年比	本年	平年	
イネ	イチモンジセセリ	平年並	平年並	多	1.2	2.0	6月以降に移植した作型で、葉色の濃いほ場は被害を受けやすい。長期持続型箱施用剤を施用したほ場では防除の必要性は低い。
	ニカメイガ	平年並	平年並	前年並	0	0	
ダイズ	吸実性カメムシ類	平年並	平年並 (予察灯)	少 (予察灯)	—	—	
カンキツ	そうか病	多	多	多	26.3	10.5	病斑のある枝や葉は除去する。
	ミカンサビダニ	平年並	平年並	前年並	0	0.0	
	チャノキイロアザミウマ	平年並	平年並	少	21.1	10.4	
	ナシマルカイガラムシ	やや多	やや多	前年並	21.1	15.5	

Ⅲ 参考

1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並	平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少	平年並の外側20%の度数の入る幅
少	やや少ないの外側10%の度数の入る幅

注：過去の発生量との比較を表すもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	前年の評価より少ない発生
前年並	前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 病虫害発生時期の基準（原則として過去10年間の発生時期と比較）

早 い	過去10年間の平均値より6日以上早い
遅 い	より6日以上遅い
やや早い	より3～5日早い
やや遅い	より3～5日遅い
平年並	を中心として前後2日以内

注：ウンカ類は1971年以降、コブノメイガは1985年以降の初確認日と比較

（ウンカは旬毎、コブノメイガは半旬毎）

(3) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1 か月気象予報（7月30日福岡管区気象台発表）

予 報	低 い (%) 少ない	平年並 (%)	高 い (%) 多い
気 温	1 0	2 0	7 0
降 水 量	4 0	4 0	2 0
日照時間	2 0	4 0	4 0

週ごとの気温傾向

予 報	低 い (%)	平年並 (%)	高 い (%)
1 週 目	1 0	1 0	8 0
2 週 目	1 0	2 0	7 0
3～4 週目	1 0	4 0	5 0